青森県立郷土館研究紀要 第33号，71-90，2009. 3

青森県における明治期の美術

對馬 恵美子 [1)]

Report on Art of Meiji era in Aomori Prefecture

Emiko TSUSHIMA

Key words：青森県，明治，美術団体，洋画，北洋画会，大和田徳治，回覧雑誌，蘭菊会，東奥日報紙

はじめに

今回は前年度の紀要（青森県立郷土館平成19年度調査研究年報）に寄稿した「明治期の美術団体　青森市書画同好会について」に引き続き、明治期の美術について調査した結果を述べるものである。前回は、明治36年に設立し大正12年まで続いた「青森市書画同好会」という日本画の美術団体（同好会）について述べたが、今回は、この稿をふたつに分けて、第一章を明治期の美術界の主要なできごとを、中央（主として東京を中心とした日本の美術界の動向）と青森県の美術界の動向とを年代順に対比しながら述べ、第二章ではいままで不明な点が多かった明治期の洋画についての調査結果を述べることとする。なお、今回の調査も、多くを東奥日報紙の新聞記事の悉皆調査を基本とし、それに加えて＜表８＞にある資料を参考として考察したものである。

第一章

慶応４年～明治元年（1868年）＊改元日９月８日

中央　橋本雪蕉（岩手県花巻市 享和２～明治10）が江戸をはなれ、故郷の花巻に帰郷する。

江戸時代の終わり頃、江戸に居を置き画人とし生活していた橋本雪焦は、当地での相次ぐ混乱や戦禍をさける為に、妻と故郷の花巻に帰郷する為に江戸を離れる。

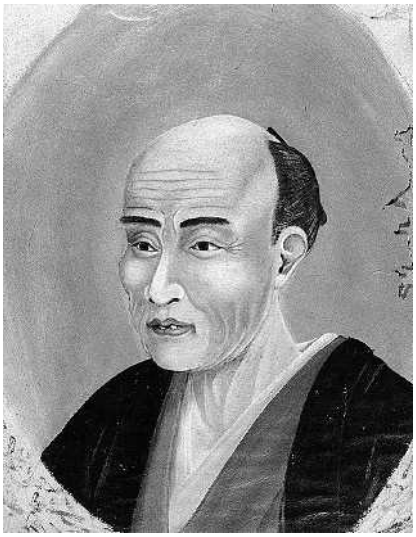
明治３年（1870年）

青森県　八戸　橋本雪蕉が花巻から八戸へ移り住む。

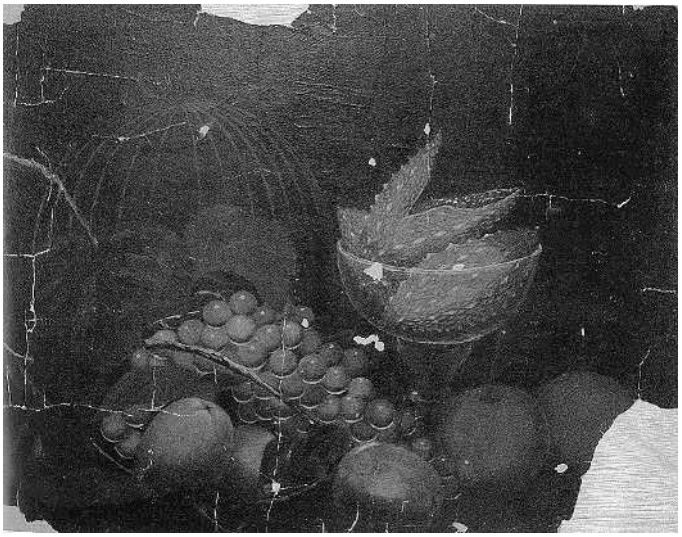
５月に橋本雪焦が郷里花巻から、後援者である豪商橋本八衛門のいる八戸に居を移し、以後死去する明治10年までの間に橋本家の庇護のもと、多くの作品を制作する。

明治４年（1871年）

青森県　弘前　田井晨善（弘前　弘化２～明治23)が写真館を開業する（青森県内で初)。



松野治敏　「父の肖像」



松野治敏　「静物」

1)青森県立郷土館　学芸主幹（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

明治５年（1872年）

中央　弘前出身の松野治敏（嘉永４～明治41）が東京にいたチャールス・ワーグマン（イギリス　1832～1891）から洋画を習う。

詳しくは第二章を参照。

青森県　弘前　**弘前の女性画家、兼平亀綾（　～明治11年）が当時女性禁制の山であった岩木山に初めて登る。**
明治初年の弘前の街並み及び岩木山が外国人によって版画で表現される。

東奥義塾は明治５年（1872）旧弘前藩学校の校舎と教授陣を引き継いで、弘前に設立された私立学校である。開学当初から外国人宣教師を教師として招聘し、洋学中心の教育を行った。アーサー・Ｃ・マックレー（嘉永６～昭和５）はアメリカに帰国後、日本論を著し、その中に明治初年の弘前の街並みや岩木山の図版を掲載した。おそらく銅版画で著されたと思われるこの２点は明治７年の以前の明治初期の県内の様子が外国人によって版画で表現された最初の作品と思われる。銅版画の制作者は不明。

アーサー・マックレー
＜肖像写真＞

マックレーが見た明治初期の弘前の町並み

マックレーが見た岩木山

明治６年（1873年）

中央　明治新政府として初めてウイーン万国博覧会に参加する。

明治期における日本の美術界を牽引したのは、国が主催する国内・外の博覧会であった。日本政府は富国強兵と殖産興業を政策の中心に置き、美術を殖産興業の重要な手段としたのである。万国博覧会・内国勧業博覧会などの内外の博覧会は、開国まもない日本と世界を結ぶ窓口となった場であると同時に、一方で明治美術の活動拠点となった場でもあった。明治維新後の明治6年（1873年）に行われたウイーン万国博覧会は、明治新政府として初めて参加した万国博覧会である。これにより、ヨーロッパでの日本の美術工芸への関心を一気に高め、その後の日本への評価を固めることになった。青森県が初めて万国博覧会と関わりを持つようになったのも、このウイーン万国博覧会からである。同博覧会への出品は津軽唐塗と漆器が青森県陸奥津軽の名で出品され、津軽塗が有功賞牌を受賞している。

明治９年（1876年）

中央　フィラデルフィア万国博覧会に青海源兵衛が津軽韓塗漆器等を出品し受賞。

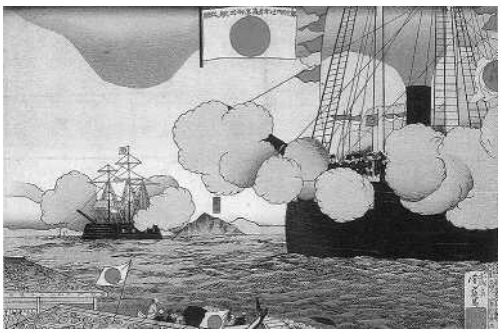
青森　**八戸　天皇行幸に際して橋本雪蕉が作品を献上する。**

青森　**天皇行幸に際して平尾魯仙（弘前　文化5～明治13）が作品を献上する。**

明治天皇は明治９年と明治14年（1881）の２度、東北を巡幸している。明治９年の天皇行幸の際には天皇は八戸に

橋本雪蕉
「王婦人昇天之図」

平尾魯仙（工藤仙乙 画）
「平尾魯仙翁之肖像と寄書」の部分



「天皇行幸時の青森港出帆錦絵」
青森県史編さんグループ蔵

は立ち寄らなかった為に、橋本雪蕉は御在所が設けられた五戸と七戸まで出向き、作品を献上している。五戸の行在所（三浦家）では「赤壁船遊」「鱸魚（ろぎょ）之図」の２点の天覧を受け、七戸の濱中家の行在所へは「郭子儀図」「高砂図」「王婦人昇天の図」が天覧に供された。

また、青森の御在所には、平尾魯仙が「安門瀑布図」「西浜の図」「岩木山の風景図」を天覧に供している。また明治天皇の巡幸に関した錦絵も制作された。

明治11年（1878年）

中央　**パリ万国博覧会に青海源兵衛と小田切勇馬が津軽塗を出品し、それぞれ賞状を受賞。**

青森県　**この年の秋に、蓑虫山人（岐阜県　天保７～明治23）が、青森県に足を踏み入れ、明治20年まで滞在する。**

蓑虫山人は幕末から明治にかけて全国を放浪した画人である。蓑虫は本県に明治20年までとどまり、その間、県内各地を訪れ、文人、画人と交わり、多くの作品を残した。蓑虫はこの間のことを自分の絵日記とも言える「山人写画」159葉として残した。「山人写画」は明治13年から書き始められその当時の青森県内の風光や人々の様子を知る貴重な資料となった。

「山人写画」に描かれている人物は、男性はほとんど断髪であるが、女性は日本髪、そして男女とも多くは和服姿で描かれている。また、蓑虫自身が画人であることから「山人写画」中には当時の書画会の様子がしばしば登場してくる。書画会とは江戸時代から行われている絵画発表の形式で、主催にあたり会主、補佐をする幹事、補助といった会の役割分担があり、前もって口コミやチラシ等で会の宣伝をする。会の当日は、画会の主人公たちは、描きためておいた書画を展覧したり、出席者のいるその場で作品制作（揮毫）をしたり、あるいは自分で所蔵している古今の絵を披露することもある。画会には酒席がつきものであり、大勢の来会者をさばくため、多くは料亭で開かれ、高い入場料（席費）を払った人だけが楽しんだ。書画会の開催は画家当人にとっては生活費、場合によっては旅費の収入源ともなった。蓑虫山人の「山人写画」中には書画会の様子や、その後の宴会の様子、また蓑虫が考古遺物にも深い関心を寄せていたことから、それらの展示も兼ねた書画会の様子が生き生きと描かれている。また、蓑虫山人が訪ねた画家は弘前の平尾魯仙と、魯仙の弟子の佐藤蔀らである。平尾魯仙、佐藤蔀は博物学的知識も豊富で、彼らの日本画で鍛錬された緻密な描写は、蓑虫にも大きな影響を与えたと思われる。

弘前市　**弘前のお寺で書画会が開催される。**

青森市　**善知鳥神社で月初めに書画会を開催する。**

上記の２件の弘前市と青森市の書画会については、北斗新聞の記事と広告の掲載による。（北斗新聞は明治10年に青森県で一番最初に発行された新聞で、その中で美術に関する記載は極めて少ない。）この事から、この頃書や詩歌や画をたしなむ同好会的な集まりが、弘前や青森で定期的に行われていた事がわかる。

蓑虫山人　＜肖像写真＞

蓑虫山人　「絵日記青森編」から鰺ヶ沢高澤寺における書画会の様子

明治12年（1879年）

青森県　**青森　塩町に中西美暢が写真館を開業する。**

浜町に柴田一奇（天保12～大正９）が写真館を開業する。

明治14年（1881年）

青森県　**明治天皇巡幸にさいして三上仙年（弘前　天保６～明治33）が作品を献上する。**

明治天皇が秋田、山形を巡幸の後に弘前の行在所に入った際に、三上仙年が「暗門瀑布図」を奉献した。これが御嘉納となり、仙年に金一封（７円）が賞揚された。「暗門瀑布の図」は、西目屋の暗門の滝全景を着色して画仙紙全紙に描いた密画の大幅であった。また、この時の明治天皇の御在所となった武田家（金木屋）は、弘前市本町の本宅

の屋根の上にさらに土台を捉え、宮殿造りの層楼をつくり、玉座や室々は全て白木の研ぎ出しとし、襖などもみな白張り、引き手は金色の金具に朱総をつけ、御座の回廊の欄干の金物は赤銅で彫刻付きの金具を使うなど、大変優美なものであったという。仙年はこの時に二間4枚建の襖に極彩色密画の「粛何月夜韓信を追う」の図も描いている。

弘前　女性の写真師矢川れん、みきの姉妹が写真館を開業する。

明治15年（1882年）

中央　第一回内国絵画共進会が開催され、本県から14人が出品する。

明治15年と明治17年には、衰退した日本画展を振興させる為の手段として、内国絵画共進会が開催された。内国絵画共進会は、農商務省を主催とし、県庁の勧業課を通して出品する方法をとっており、勧業政策の一環として、日本画を中心とする伝統絵画奨励の事業であった。内国絵画共進会は流派ごとに六区に分けられた。一区は大和絵の傾向、二区は狩野派、三区は中国から伝わった北宗画、南宗画の系統、四区は浮世絵系統、五区は円山派、六区はそのいずれにも属さないものに分類された。

青森からの出品は第二区狩野派に外崎鶴幼（繁一郎）、第三区に原田金蔵、高屋旭高（常之進）、工藤仙乙（文司）（弘前　天保10～明治18）、工藤誠意、山形太郎九郎、山之健吉、小山内健三郎（釣月）（弘化1～大正14）、澤治信、榊田彦蔵、三上仙年、また函館県から弘前出身の木戸竹石、第六区に大井旭嶺、須藤勝五郎の計14人が出品している。このように三区が最も多く、江戸後期からの文人趣味とあいまって地方に普及した南画、文人画の勢力が大きく、またこの14人の日本画家のうち、少なくとも11人（大井旭嶺と澤治信が青森市、須藤勝五郎は不明）が弘前の日本画家である。なお明治17年の第二回の内国絵画共進会への本県の出品者は、一人もいない。

明治21年（1888年）

弘前　東奥日報紙に「東京大家書画紹介」の広告がのる。

明治21年12月6日東奥日報紙が創刊された。明治21年12月6日付けに「東京大家書画紹介広告」が載る。勝海舟ら書家、服部波山、奥原晴湖ら画家による書や絵画作品の斡旋、販売の他、文書の代筆や添削も請け負うという内容であった。

明治22年（1889年）

中央　東京美術学校が開校される。

明治10年代後半から台頭した国粋主義の波に乗り、明治20年（開校は明治22年）にアメリカ人フェノロサと岡倉天心によって設立された東京美術学校は官立の美術学校としては工部美術学校にう継ぐ2番目の学校。工部美術学校は西洋美術のみの学校だったのに対し、東京美術学校は伝統美術のみ。新時代の近代国家にふさわしい、西洋美術を吸収した新たな伝統美術主義の創出に重点がおかれ、開校当初の学科は絵画、彫刻、美術工芸の三科のみであった。その中でも中心は日本画。教官スタッフは、狩野派、円山四条派、大和絵に力点がおかれ、南画、南北合派、浮世絵が排除された。東京美術学校には本県から明治31年に鳥谷幡山（七戸町　明治29～昭和41）が入学したのを皮切りに、本県人も入学するようになる。詳しくは、＜資料1＞の「東京美術学校入学者一覧」を参照。

弘前　1月12日、弘前東長町延年楼において第一回県美術懇親会が開かれる。

東奥日報紙（明治21年から発刊）の明治22年1月11、12、25日には「青森県第壹回美術懇親会」の広告が載る。さらに1月27日に同新聞にはその懇親会についての記事が載った。ここで、注目したいのは「青森県第壹回美術懇親会」という見出しにある「美術」ということばである。「美術」という造語は明治6年のウイーン万国博覧会に日本が参加するために、出品規程を翻訳した時に生まれた。その後、政府は明治10年に、外国の万国博覧会をまねて、第一回の内国勧業博覧会を国内で開催、回を重ねるにしたがって、「美術」という言葉と美術品を発表する前の時代とは異なる「展覧会」という形式と「展覧会」という言葉自体も、しだいに地方にも広まっていったと思われる。よって、明治6年の「美術」という言葉の誕生から16年が経過した頃には、青森県内でも「美術」が使われるようになっていたことがわかる。ただ、この美術懇親会は美術という言葉を使ってはいるが、その内容は日本画家や書家が揮毫し、酒宴も伴うもので、前の時代から行われていた書画会の形式で行われている。懇親会の参加者には三上仙年、長利仲聴（歌人　弘前　文政6～明治36）、傍島正郡（歌人　平内町）、高山文堂（書　弘前　嘉永2～昭和16）の画人、歌人、書家等の名がある。

明治23年（1890年）

中央　明治二十三年の第三回内国勧業博覧会に野沢三千治、工藤文司（仙乙）（弘前　天保10～明治28）、三上英二（仙年）が出品。

万国博覧会を規範として内国勧業博覧会が明治10年から明治36年にかけて５回開催された。内国勧業博覧会は海外から移植した技術・情報を広く伝達し、国内勧業を勧奨するもので、万国博覧会と表裏一体の機能を果たすことになった。本県では、明治10年の第一回、明治14年の第二回の内国勧業博覧会には出品者がなく、明治23年の第３回内国勧業博覧会弘前の作家が３人が出品している。

明治24年（1891年）

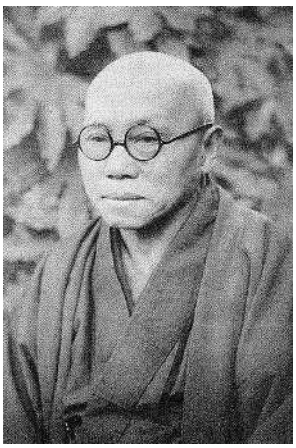
青森　同年の東北線開通を記念して川口月村（栃木県　弘化２～明治37）が「日本鉄道陸奥地方画譜」を制作する。この作品には盛岡から北上して青森にいたる岩手県分25景、青森県分25景が描かれている。

明治26年（1893年）

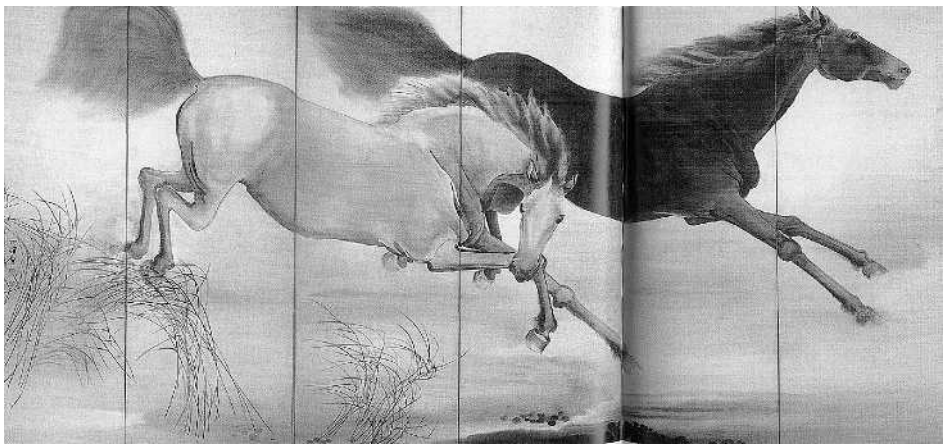
中央　シカゴ・コロンブス万国博覧会に、三上平次郎が漆器出品。

京都　野沢如洋（弘前　慶応１～昭和12）が京都に上り、今尾景年（京都　弘化２～大正13）に師事する。

万国博覧会、勧業博覧会、日本青年絵画協会等の明治期の主要な博覧会・展覧会の中で、本県出身者で最も活躍したのが野沢如洋である。三上仙年に学んだ如洋は、明治26年京都に上り、今尾景年に師事し円山・四條派を習得、山水画の名手と言われ、毎年のように様々な画会に出品し、上位の成績を治めていた。明治37年から中国に渡り4年間研鑽を積み、帰国してからは、反官展の姿勢を貫き通し、水墨画家として孤高の道を歩んだ。



野沢如洋　＜肖像写真＞



野沢如洋　「駿馬之図屏風の左遷」

青森県　青森市　　**８月27日から８月29日まで油川小学校で、油川美術展覧会を開催。**

11月３日から５日まで　青森市高等小学校で美術展覧会を開催。

明治26年というかなり早い時期に「美術」と「展覧会」のふたつの語がそろった催し物が行われていることに注目したい。前述したようにこの二つの語は、前時代の書画会の形式とは異り、明治以降に用いられるようになった言葉であり、油川小学校、高等小学校とも会期が１日限りではなく、複数日であることも展覧会の形式にあっている。油川小学校の展示は、日本画や書が中心の内容で、高等小学校の方は、展示内容の表記が無い為に不明である。油川美術展覧会は油川村（現青森市）の岩東善司が発起人で、会期中に約千名の参観者があった。また、高等小学校の方は学務委員町会議員発起人となり出品点数が千余点、参観者の頗る多かったとある。

弘前　神忍が写真館を開業する。

明治27年（1894年）

中央　第三回日本青年絵画共進会で野沢如洋が三等褒状。

中央における在野の動きとしては、日本青年絵画協会が、明治24年10月、岡倉天心（横浜　文久２～大正２）、寺崎廣業（秋田県）らの青年作家十余名により結成される。日本青年絵画協会は毎年絵画共進会を開催した。

明治28年（1895年）

中央　　**第四回内国勧業博覧会展には野沢三千治（如洋）（妙技三等賞）、工藤仙乙が出品。**

第四回日本青年絵画共進会に如洋、鳥谷幡山がそれぞれ三等褒状を受賞。

青森県　**七戸町　鳥谷幡山が東京へ出て、寺崎廣業（秋田県　慶応２～大正８）に師事。**

明治29年（1896年）

中央　第一回絵画共進会を開催。

東京美術学校に西洋画科が新設される。

同年３月に日本青年絵画協会は日本絵画協会と改称、同年９月洋画の白馬会と提携して第１回絵画共進会を開催する。翌30年より明治36年まで毎年春秋の年２回の共進会を開催した。これには、野沢如洋、鳥谷幡山（七戸）、対馬子龍、成田雲峯、高橋竹年（弘前　明治20～昭和42）、藤田義作、安田仙洋が出品している。

同年、ようやく東京美術学校に西洋画科が新設され、フランスで絵を学んできた黒田清輝（鹿児島　慶応２～大正13）が主任教授に、藤島武二（鹿児島　慶応２～昭和18）や岡田三郎助（佐賀県　明治２～昭和14）らが助教授に任命される。東京美術学校への本県の若者たちも次々入学し始める。大橋（旧姓古郡）貞一（弘前市　明治21～昭和42）や大川亮（平賀町　明治14～昭和33）羽場金司（弘前市　明治19～大正５）、関彦四郎（弘前市　明治21～昭和36）らである。詳しくは＜表１＞参照。

大川は最初に農業実科（現東大農学部）に入学するが絵への志しを捨てきれず東京美術学校へ移ったものの、家庭の事情で明治36年の卒業前に青森に呼び戻されている。大川は、青森県において明治期の洋画の先駆者の一人でもある（詳しくは第二章参照）が、次第に、農村を土台とした美術工芸へ重点を移していくことになる。

明治30年（1897年）

中央　　鳥谷幡山が東京美術学校に入学する。

青森県　弘前　この頃に、三上仙年を中心とする弘前絵画会が設立され、研究会や書画会が行なわれる。

明治30年代の弘前では、三上仙年を中心とする弘前絵画会が設立され、月に一度の研究会、年に一度の展覧会が行われていた。木村捨三の回想によれば、弘前絵画会は市内の他の俳句などの会の活動に比べて抜きんでていたという。しかし三上仙年の死去に伴い活動が名ばかりの団体となりその活動を終える。

木村捨三が入会したときには、会長が三上仙年、副会長が仙乙の後を受けて長内釣月がつとめていた。毎月一回交互に会員の宅に集まる。春秋は大会は会長を始め全紙一点ずつを出陳、席上揮毫席を設け、賛助員の愛好者の需めに応じた。会員は榊田蘭堂、山上魯山、高橋仙龍、工藤仙来、工藤晴好、清野仙漂らで、約30名であったという。

三上仙年
＜肖像写真＞

三上仙年　「孔雀に牡丹」
弘前市立博物館蔵

三上仙年　「鍾馗」
明治29

工藤仙乙　「椿に小禽」
明治28

明治33年（1900年）

中央　パリ万国博覧会に、野沢如洋他出品。

銀牌を写真家の柴田一奇、銀牌を写真の中西美暢、銅牌を木通蔓細などの工芸分野で石田庄司、三上平次郎ら、褒賞は野沢如洋（1865～1939）の日本画「夏山夕景」。

高橋竹年が伯爵津軽承照によばれ、画道修道のために上京して伯爵邸に住む。

明治34年（1901年）

中央　鳥谷幡山が天籟塾同士の野田九浦（東京　明治12～昭和46）、町田曲江等と美術研究団体「美術研精会」を組

織する。

鳥谷幡山は明治34年に天籟塾同士の野田九浦、町田曲江等と美術研究団体「美術研精会」を組織し、機関誌「研精画誌発行。会長土方久元、顧問寺崎廣業、川合玉堂（愛知県　明治６～昭和32)、尾形月耕（東京　安政６～大正９)、小堀鞆音（栃木県　文久４～昭和６)、主幹に紀淑雄、幹事は鳥谷幡山。明治末期には二百名の会員を擁する。尚、大正２年に「研精画誌」は69号をもって終止符をうち、「研精美術」と改称、それと同時に幡山は「研精会」を退会、台湾、中国探訪を行う。

鳥谷幡山
＜肖像写真＞

鳥谷幡山　「浦小嶋秋色」昭和16

鳥谷幡山　「高士濯足」
昭和35

一戸岳逸
＜肖像写真＞

青森県　**一戸岳逸（弘前　明治16～昭和14）が青森市書画同好会を設立する。**

同年１月に青森市書画同好会が創立される。この会は青森市において書畫の研究と奨励をはかることを目的に、一戸岳逸が設立した日本画の同好会である。同会は日本画の陳列や斡旋の他に、被災者、あるいは青森市内の学校等へ作品やその売上金の寄付を行うなど救済的な活動も行い、大正12年までその活動の記録が残っている。また、岳逸は青森の美術の普及と発展を願い、他団体への擁護にも熱心であった。

明治36年（1903年）

中央　**第五回内国勧業博覧会展には野沢如洋が出品、褒賞を受ける。**

高橋竹年(弘前　明治20～昭和42)が上京し、野村文挙の門人となる。

青森県　**八戸　久保提多（八戸　明治18～昭和30）が、奈須川藻光（八戸）等と絵画研究会「野の花会」を結成する。**

久保提多が八戸尋常小学校代用教員となり、同年に東京美術学校に入学するまでの間に、奈須川藻光等と日本画の絵画研究会「野の花会」を結成。作品を一綴りにし回覧勉強したという。

久保提多
＜肖像写真＞

久保提多　「蘆雁」昭和30　川越市立初雁中学校蔵

明治37年（1904年）

中央　**セントルイス万国博覧会では、青森県木通蔓細工組合が金賞、三上平次郎が銀賞他、中村甚吉、漆器樹産合資会社が出品。**

明治38年（1905年）

中央　　福田剛三郎（八戸　明治19～昭和52）が上京、黒田清輝の開いた白馬会で絵を学ぶ。

この年に福田剛三郎が上京し黒田清輝の開いた白馬会で絵を学び、明治40年に中村不折らと展覧会を開催した。中村は浅井忠やフランスのラファエル・ラコンらに師事し歴史画の伝統的な手法を習得した画家で太平洋画会系の中心的存在として活躍した人である。福田は県南方面の洋画の先駆者である。

福田剛三郎　「静寂」

福田剛三郎　「風景」昭和５

福田剛三郎　「婦人像」

明治39年（1906年）

中央　　松山忠三（板柳　明治13～昭和19）が上京し、太平洋画会研究所や日本水彩画協会で水彩画を学ぶ。

詳しくは第二章を参照

***青森県　弘前*　東日流会が設立される。**

東日流会は弘前を中心とした会員が持ち寄った書画、骨董、工芸品、文書等の鑑賞会である。同年から明治43年まで活動。

***青森*　青森中学（青森第三中学）の図画教諭である大和田篤治（高知県　～大正２）が同中学校内に洋画の研究所を設置。**

青森市内で設立された洋画研究会は、おそらく県内におけるはじめての洋画の研究会であろう。詳しくは第二章を参照。

明治40年（1907年）

中央　文部省主催の文部省美術展覧会（文展）がはじまる。

フランスのサロンと同じ官設展を日本でも開催したいという意向から、文部省を主体に日本画、西洋画彫刻の三部門の展覧会をひらいた。いわゆる文展（文部省美術展覧会）と呼ばれるもので一連の官展の始まりとなるものであった。先に述べた勧業博覧会等は勧業政策に基づくものであったが、ここではじめて文教政策の立場の展覧会が始まることとなった。この文展からはじまる官設の美術展は、幾たびか名称を変えながら、昭和32年までの長きにわたって継続し、日本の美術界の中心に位置する団体となるのである。文展は第１回目から審査員の属する団体のことで紛糾し、またアカデミズムとなった紫派の勢力が中枢をしめ、他の画風を認めない傾向がみられた。これらの問題を抱えながら文展は次の大正の時代へと引き継がれて行く。青森県関係者が文展に入選するのは、大正に入ってからである。

今　純三　＜肖像写真＞

明治41年（1908年）

***青森県　弘前*　平尾魯仙が津軽の景観を晩年に描いた「合浦山水観」（西浜）と「暗門山水観」の写しを、弟子の山形岳泉が制作する。**

明治42年（1909年）

中央　今純三（弘前　明治26～昭和19）が太平洋画会研究所に入り、中村不折、満谷国四郎らに指導を受ける。

明治43年（1910年）

中央　　松山忠三が水彩画家丸山挽歌（長野県　慶応３～昭和17）の渡欧に同行しロンドンに渡る。

青森県　青森市　洋画の団体「北洋画会」が設立し、高等小学校において洋画展覧会を開催する。

詳しくは第二章を参照。

明治44年（1911年）

青森県　青森　　北洋画会の第２回展覧会（１月５日～８日、青森師範学校において）開催。

北洋画会の第３回展覧会（「西洋画展覧会」）（８月５日～７日、青森師範学校において）開催。

弘前　　この頃東京美術学校の卒業生、在校生たちによる洋画の美術団体弘前美弘会があった。

蔦谷龍岬が弘前産業会館にて弘前絵画展覧会を開催。（８月１、２日）

三本木　アマチュア倶楽部主催洋画展覧会が開催（９月10日、11日、三本木小学校において）

明治45年～大正元年（1912年）７月30日改元

中央　今和次郎（弘前　明治21～昭和48）が東京美術学校図案科を卒業し、早稲田大学の建築学科の助手となる。

大阪　高橋竹年が大阪に転居する。（昭和20年まで）

今和次郎　＜肖像写真＞

今和次郎　「装飾図案十八・18」
東京芸術大学美術館蔵

今和次郎　「装飾図案十八・６」
東京芸術大学美術館蔵

＜表１＞　東京美術学校入学者一覧（青森県出身関係者）

名　前	本名	入学年月日	卒業年月日	専門科	他	出身地	生年	没年
鳥谷幡山	又蔵	明治31	途中退学	日本画科	美術研精会。竹之台茶話会。橋本雅邦、寺崎廣業に師事。東京市下谷区上根岸町82に住む。	七戸町	明治９	昭和41
工藤青山	晨	明治25	明治32年	日本画科	外崎鶴幼（狩野派）に師事。卒業後青森師範学校勤務。	弘　前	明治６	昭和21
矢川友弥		明治26	一年で退学	日本画科	外崎鶴幼（狩野派）に師事。肖画家。写真館経営。	弘　前	明治７	昭和24
三橋　清			明治32年	彫 刻 科				
久保提多		明治37	明治41年	日本画科	結城、岡田秋嶺、寺崎廣業、後に下村瞰山から指導を受ける。	八　戸	明治18	昭和30
野際　潔		明治37						
古郡貞一		明治39	大正4年中退	洋　　画	後に大橋に改姓。	弘　前	明治21	昭和42
羽場金司		明治42	大正２年	洋　　画		弘　前	明治19	大正５
関彦四郎		明治43	大正４年中退	洋　　画	藤島武二教室に学ぶ	弘　前	明治21	昭和36
大川　亮			明治35年退学	洋　　画		弘　前	明治14	昭和33
蔦谷龍岬	幸作	明治39	明治44年	日本画科		弘　前	明治19	昭和８
今和次郎		明治40	大正元年	図 案 科		弘　前	明治21	昭和48
小岩　峻			明治35年７月	漆 工 科	青森県工業学校教諭			
高橋美邦	政美		明治26年	特別の課程	秋田県立横手中学校教諭（秋田県平鹿郡横手町古川15に住む）	八　戸	明治６	

＜表２＞　明治期に設立された青森県の美術団体

団　　体　　名	地　域	分　野	設　立　年	最　終　年	会　　主	絵　　画 発表形式	掲載 回数
青森県美術懇親会	弘前市		明治22年	不　　明		書画会	1
青森市書画同好会	青森市	日本画	明治34年	大正12年12月	一戸岳逸	書画会	51
佳　友　会	黒　石		明治37頃	明治38年頃			4
弘前古物展覧会	弘　前		明治37年	明治38年頃			1
硯　友　会	青森市	書	明治39年		本間静山		36
文　墨　会	弘　前	書	明治39年		中野如淵		4
東 日 流 会	弘　前	日本画	明治39年	大正10年			2
青森市書画骨董一品会	青森市	日本画	明治39年7月29日				16
青森市洋画研究会	青森市	洋　画	明治39年		大和田篤治		
野 の 花 会	八　戸	日本画	明治40年頃		久保提多		2
温　習　会		書	明治43年頃				
北 洋 画 会	青森市	洋　画	明治43年			展覧会	17
弘前美弘会	弘　前	洋　画	明治44年頃			展覧会	1
三本木町アマチュア倶楽部	三本木町	洋　画	明治44年以前	不　　明		展覧会	1
青森市合浦会	青森市		明治45年				2

＊表の掲載回数とは、明治期において東奥日報紙上で記事になった回数である。

第二章　明治期の洋画の導入について

今回の調査で、明治期における新たな洋画研究会と北洋画会などの洋画の美術団体の存在が明らかになった。ここでは、その研究会と団体を中心に、明治期の洋画の動向についてできるだけくわしく述べることとする。

青森県における明治期の洋画の導入

明治期において青森県への洋画の導入はどのようになされたのであろうか。

ワーグマンは元陸軍大尉であったが退役後イラストレーテッド・ロンドン・ニュースの特派員画家となり1961年来日していた。ワーグマンは本格的な油絵画家ではなかったが、高橋由一（栃木県　文政11～明治27）をはじめとする日本の黎明期の洋画家たちが教えを受けており、その為にワーグマンは近代日本洋画の最初の師と言われている。このワーグマンから教えを受けた洋画家たちの中に青森県出身の松野治敏（弘前市　嘉永４～明治41）がいた。治敏は津軽藩の部隊に入隊した時に、東京から教官として来ていた芳野保次郎（芳野はその後に帰京）という人物と出会う。治敏が所属していた部隊が明治5年に近衛師団編入となり、治敏も上京することになった。そこで先の教官保次郎に再び出会い、彼の紹介でワーグマンから洋画を習うことになる。治敏は除隊後の明治14年に故郷に帰るが、残念なことに洋画の技法が他者へ引き継がれる事は無かった。

また、明治中期の頃の青森県内の洋画に対する意識については、明治45年２月21日付けの東奥日報紙森飛雪が寄稿した「青森と洋画」に書かれているのでそれを参照にする。明治35年頃の本県の人々は、油絵と水彩画の区別どころか、従来の日本画と洋画の区別もつかない人が多かった。しいていえば、反物についている石版摺りや缶詰のラベル、名所図絵のたぐいを、洋画と思っていたらしい。しかし日露戦争があった明治37、38年頃から水彩画と絵葉書の流行にともない、（太平洋画会の三宅克己、明治美術会の大下藤次郎らが活躍し専門書の発刊や日本水彩画会が設立される。）絵葉書や雑紙に洋画がのるようになってから、洋画で描かれた人物や風景画が、日本画よりも写実的に見えることから、人々が洋画に対して興味を持つようになり、明治の終わり頃には、中流家庭や商店などで水彩画や絵を客間や店頭などに飾るようになったという。

水彩画家　松山忠三

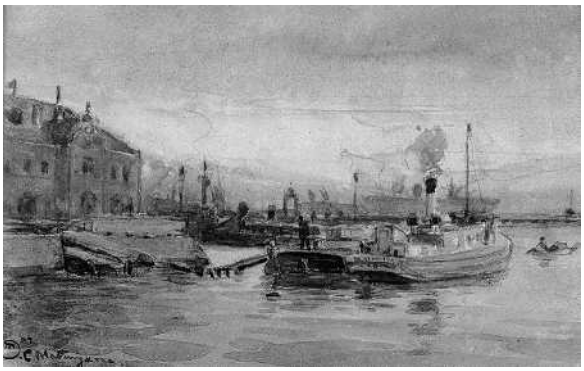
明治35年頃は水彩画が全盛期を迎えた。太平洋画会の三宅克己、明治美術会の大下藤次郎らが活躍し専門書の発刊や日本水彩画会が設立される。大下は明治40年丸山晩霞らと日本水彩画研究所を設立する。

青森県板柳町出身の松山忠三（明治13～昭和29）は明治39年上京し丸山晩霞の家に寄寓しながら太平洋画会研究所や日本水彩画協会に通った。またこの頃、水彩画の専門誌みづゑも発刊され、忠三の作品も数回掲載されている。

さらに明治43年丸山晩霞の渡欧に際して、忠三も同行してロンドンに渡る。忠三は渡英後に、チェルシー美術学校に通って水彩の勉強に励んだ。その後英国水彩画協会の会員となり、ロンドンやスコットランドの美術館に作品が収蔵されるまでになる。忠三は大二次世界大戦後イギリスに帰化する。彼は戦後の混乱の為に、強い望郷の念をかなえることなく、昭和29年に英国で没した。

松山忠三　＜肖像写真＞

松山忠三　「旅人宿」



松山忠三　「日光中善寺湖」明治42

洋画研究会

青森市において、初めて洋画の研究所を開いたのは大和田徳治である。

大和田は高知県出身で明治26年に同じ高知県出身の中江兆民を保証人にして、中村不折、三谷、鹿古木、石川寅治らと同年に小山正太郎の開いた画塾不同舎に入り、小山から教えを受けた。大和田は油絵の静物画を最も得意としたという。篤治は不同舎を出た後に図画の教員となり、明治36年香川県高知中学校に赴任、さらに明治37年２月に青森市内の第三中学校（青森中学校）に赴任となった。大川亮の回想によれば、当時の第三中学校校長の石井祐斎が絵に大変理解があり、油絵を習得した大和田を図画の教師として招いたという。大和田は明治39年５月に同中学校内に洋画の研究所を組織する。これも大川の記憶によれば、会員は約20名で、中学生の他に、当時12歳の藤野草明や森非折、50代の工藤慶吉、西田亨、大川亮等の一般希望者も含まれていたという。この他には越前翠村、女性では落合らん子、渡辺まさ子らの名前も見られる。落合、渡辺は野外写生をした県内初の女性たちと言われている。

東奥日報の掲載記事から、洋画研究会の活動を見てみると、明治39年５月13日には洋画研究会の発会式の他、規則の修正の他に役員の選挙も行われ会長は大和田篤治、事務所は新町4番戸、幹事は次回の５月27日の選挙で決定（幹事名はその後の掲載記事がなく不明）とあり、組織的な研究団体を目指していたと思われる。６月17日午前八時から青森中学校内で洋画研究会を開催、次回は７月１日開会予定とあるが、実施の有無は不明である。新聞掲載記事によれば７月15日に研究会を開催し、９月まで休会の理由が書かれていて、大和田が暑中休暇を利用して上京し、今秋に洋画研究会の展覧会を開催する為に太平洋画会等の東京の美術団体に協力を仰ぐ為とある。

明治39年８月23日の記事には大和田が太平洋画会と三宅克己ら水彩画家たちの強力をとりつけた旨あり。しかし、10月９日付け記事には、青森師範学校の図画教師の足立啓が青森市に東京図画講習会支部を設置し、来年の春に洋画展覧会を開催するので、共済にしないかとの相談を受けて、大和田が思案中との内容があり、結局展覧会は開催されないまま、大和田は転勤してしまう。さて洋画研究会の活動内容については明治39年９月９日青森中学校内で第４回研究会開催の記事がのる。翌明治40年の５月６日付けには事務所を青森市安方の大和田へ移したことと、休会中であった研究会を再昨日開催した記事があり、洋画研究会の活動はかなり不定期なものであったことがわかる。明治41年５月19日付けの新聞には、５月22日より３週間の予定で第三中学校内で洋画研究会を開催する予定とあり、中新町の洋画研究会事務所に申込み希望されたいと、勧誘の記事が載る。これが洋画研究会に関する最後の新聞記事となる。翌年の明治42年３月に、大和田は郷里の高知県師範学校へ転勤となる。

このように、洋画研究会に関する記事は約10件のみ（＜表４＞参照）で、その活動内容の詳細はあまり知ることができないが、明治39年には青森県内に西洋画の研究団体が存在した事は明らかである。しかもそのきっかけをつくったのが、不同舎で学んだ大和田篤治であったことは、まことに興味深い。なぜなら、日本の明治期の美術教育において、不同舎と東京美術学校が重要な役割を果たしたからである。明治初期からほとんどの専門教育諸学校と普通教育の中等学校で図画が教えられることになったが、その為に多くの図画教員が必要になり、民間の西洋画塾や美術学校の出身者がその需要に応え、その結果、日本各地に西洋画を伝えられることになった。この時に東京美術学校や不同

舎の関係者が多くを占めたという経緯があり、この青森県もその例にならっていることになる。

大和田が学んだ不同舎は、小山正太郎が明治22年に設立した私塾である。小山は東京師範学校、東京高等師範学校図画調査会委員、教科書図書検査委員、図画教科書編纂委員をつとめ、図画教育制度の整備に尽力し、明治時代の洋画教育を語る時に小山正太郎を抜きに語ることはできないと言われる人物である。その小山が設立した不同舎に学んだ大和田が図画教諭として赴任した来たのが青森市の第三中学校であった。個を尊重し押しつけの教育をしなかったという小山に学んだ篤治もまた、同様の教え方をしたのではないかと思われるのは、明治45年の東奥日報紙に掲載された森非折の回想に、青森において洋画が盛んになったのは「恩師大和田篤治先生であるという事は何人もこれを拒まぬだろうと思うのである」「僕らは青森の洋画の発展していいくに連れて益々先生を忘却なる事が出来ないと思うのである。」とあり、その文章には、短いながら大和田に対する尊敬と敬愛の思いが感じられるからである。

大和田が育てた教え子達は、次の青森市の洋画団体「北洋画会」の設立へ、さらに大正期に設立した重要な在京美術家の団体「六花会」の設立の主要なメンバーとなり本県の洋画が発展していくのであるが、このことからも、篤治の存在が本県の洋画に果たした役割は誠に大きいと思われる。しかし、調査の段階で、篤治に関する情報や作品の所在の確認の為に、篤治の出身地にある、高知県立美術館に問い合わせてみたところ、彼の作品や肖像写真が一点も発見されていないことがわかったのは、残念な限りである。

北洋画会

大和田篤治の洋画研究所で学んだ藤野草鳴、森非折、越前翠村等は篤治が去った後の明治42年９月に洋画の美術団体「北洋画会」を設立した。北洋画会は数年間の活動にとどまったが、明治43年９月３日から４日、明治44年１月、８月に計３回の西洋画の展覧会を開催した。以下、北洋画会の活動について述べる。

・北洋画会の設立と会則

明治43年４月３日に、一戸岳逸、吉崎北陵、大川亮、落合らん子、山■■■（山内元八か？）諸氏にて北洋画会が設立される。会則は下記の通りである。

会則　第１条　本会は洋画の発達普及を以て目的にす

会則　第２条　本会の趣旨を賛するものは個人と雖も会員とばることを得

会則　第３条　本会は年二回展覧会及び毎年第四日曜日に■会を開く　此の際会員は必ず自作を出品して交互に批評し以て思想の交換に努む

会則　第４条　退会せんとするものは会員書及び理由を明記せる届け出を本会に差し出すべし

会則　第５条　会員にして不都合の行為ありたるときは評議の上除名すべし（文中■は判読不能文字）

・北洋画会の発会式

明治43年４月10日に北洋画会の発会式が青森市浦町の福士方において行われる。出席者は賛助員の一戸岳逸、吉田北陵、落合さん子、山崎勇馬、山内元八、松永工。発起人の沢才一、藤眞一、其他会員であった。当日は下沢が北洋画会の設立の主旨について述べた他に、規則や集会の日時について協議した後に、絵についての談話や五姓田や会員の描いた洋画も陳列し、批評会も行った。

・北洋画会の研究会

明治43年４月24日に青森市浦町の下沢才一宅で研究揮毫会を開催した。

・北洋画会の第１回展覧会（明治43年９月３日～４日、青森市高等小学校において）

明治43年９月３日と４日に、青森市高等小学校を会場に青森市書画同好会と北洋画会が合同で展覧会を開催した。

これは同小学校が８月30日の落成開校式にちなんで開催した記念祝賀行事のひとつと思われる。陳列場は２教室が使用され、書画同好会の日本画と北洋画会の洋画が展示され一般に公開展示した。尚、この他に、陸松斎門下の活花、児童生徒の作品も展示された。

北洋画会からは水彩画、油画、墨絵、パステル、日本画の約90点が展示された。出品内容は藤野真一「蝉の声」他水彩画25点、越前翠村「瀧川の黄昏」他水彩画11点、三浦辰夫の油画２点と俳画水彩１点、高田考一郎「ナポレオン」他の墨絵２点、棟方忠太郎２点（作品名、技法不明）、猿賀勇吉２点（作品名、技法不明）、森非折「荘厳」他油画７点とパステル画１点、吉崎北陵の日本画３点、岡吉江と古郡（貞一か）の合作の油画１点である。

・北洋画会の第２回展覧会（明治44年１月５日～８日、青森師範学校において）

明治44年１月５日から８日まで青森師範学校において第２回展覧会を開催。出品点数は水彩画120点、油絵18点、墨絵55点の他に参考品として五姓田、大和田篤治の作品。出品者は三浦恵雨、工藤九折、下澤才一、今克己、大沢慶一、森非折、越前翠村、境邦雄、高田孝一郎、藤野真一。５，６日は吹雪の為、観覧者は少なかったが、７日には約180名の観覧者が来た。最終日は北洋画会の新年会及び出品作品の批評会を開く。

・北洋画会の第３回展覧会（「西洋画展覧会」）（明治44年８月５日～７日、青森師範学校において）

同年８月５日～７日（当初６日までの予定であったが一日延期する）まで師範学校付属小学校で、由井忠助（県外作家）が来県したのを機に弘前美弘会と北洋画会の共同（共催）の「西洋画展覧会」を開催する。出品作品は油絵約40、水彩画約60、日本画数点の計約100点。出品作家は弘前美弘会の由井忠助、羽場金治、古郡貞一、北洋画会は大川亮、白石龍太郎、越前翠村、今克己、森非折、藤野真一。（出品目録については、＜表３＞を参照）

南部方面の洋画の活動

南部方面の明治期の洋画の動きについては、東奥日報紙に掲載される記事が、どうしても東奥日報社のある地元の青森中心に重きが置かれてしまうことや、南部方面の美術に関する資料も津軽に比べるとさらに、少ないことから、詳しくを知ることができなかった。

・アマチュア倶楽部主催洋画展覧会が開催（明治44年９月10日、11日、三本木小学校において）

東奥日報紙の掲載記事によれば、明治44年９月10、11日に三本木町（現、十和田市）の三本木小学校においてアマチュア倶楽部主催で洋画展覧会が開催されている。出品作品は水彩画、油彩画の洋画が約100点で、三つの教室にわけて展示した。会期の二日間の間に、五戸、七戸、八戸から約1500人も観覧者があったとあり、その盛況ぶりが伺える。同展覧会の目録＜表６＞を見ると、出品点数や油彩画、水彩画の割合など青森で開かれた第三回の北洋画会とほぼ同じ内容であることがわかる。この記事は南部方面の洋画の活動を知る貴重なものであるが、残念ながら、アマチュア倶楽部に関する記事はこの１件のみで、この倶楽部のメンバー、活動内容等の詳細については、今後の調査に委ねたい。

まとめ

青森県において、明治５年という早い時期に洋画を学んだのは弘前の松野治敏であり、治敏の師は日本の近代洋画の父と言われる高橋由一が油絵の手ほどきを受けたと同じ人物であるチャールズ・ワーグマンであった。ただ、残念なことに、かれが帰青した後に、その洋画の知識や技術が他に伝えられることがなかったという。その理由として資料によれば、当時の弘前では、油絵具等の画材を入手するのが困難であった為というが、それに加えて彼の周囲に、新しい西洋の美術に関心をしめす者がいなかった不運もあるであろう。

明治26年には明治以降に使用されるようになった「美術」「展覧会」のふたつの言葉がついた催し物が行われたが、その展示内容は日本画や書という従来の内容であり、洋画の展覧会はまだ行われていなかった。この頃の県内の人々の洋画に関する認識としては、森非折が明治45年に回想しているように、缶詰のラベルや反物のレッテルが洋画というもので、満州事変の前後から水彩画や絵葉書の流行に伴い、従来の日本画にくらべると洋画がより写実的に見えることから、洋画に対する理解や興味が深まって行った。そして明治39年に青森市の高等小学校内に不同舎で洋画を学んだ大和田篤治が洋画の研究所を開いたことから、そこで学んだ人々が中心となって、明治43年に北洋画会が設立、同年から翌年にかけて３回の洋画の展覧会を開催した。この北洋画会の展覧会には弘前で設立した弘前美弘会という洋画の美術団体も参加、また青森市で日本画の書画同好会を設立した一戸岳逸との関係も認められている。また同じ時期に北洋画会の展覧会と同規模の三本木アマチュア倶楽部による洋画の展覧会が三本木町でも開催されている。このように、明治40年代には県内でも洋画の展覧会が行われるようになった。こうして、一般の人々も洋画に触れ合う機会が増して行ったと思われる。

今回の調査で最も注目したいのは、洋画研究所で洋画を学び、北洋画会の会員であった森非折、越前翠村、木谷末太郎らが大正期の六花会の主要なメンバーとなり、六花会はやがて昭和期の東奥美術展へと発展していくことである。この一連の流れは青森県の美術界の根幹をなすものと考えられる。このことについて今後の調査をさらに進めて、明らかにして行きたい。

※文中で出身地、生没年がわかるものは（　）内に記した。

付記

小稿の作成にあたり、次の方々および機関から多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
高知県立美術館、阿部育也氏、太田原慶子氏、櫛引洋一氏、渡辺理賀氏、根市悌三氏。

資料編（図版）明治期の文学者と洋画家と東奥日報

青森市の洋画研究会と北洋画会には文学と美術の両方に勝れた才能をしめす人物が多かった。このため、青森市に本社がある東奥日報社が発行する新聞の文芸欄には、文学者の寄稿が多く載せられ、その記事には文学だけにとどまらず美術関係の内容にも、しばしば及ぶ事となり、明治期の美術の動向を知る貴重な資料となったのである。また、明治34年に設立した青森市書画同好会の会主一戸岳逸は東奥日報の記者であったので、当同好会の記事が頻繁に掲載されたことも、幸いなことであった。

＜蘭菊会の回覧雑誌第１号「白日」＞

左図は明治42年１月に発行された蘭菊会の回覧雑誌の第１号「白日」。

蘭菊会は明治39年１月、北津軽郡松島村（現五所川原市）で和田山蘭と加藤東籬が新派和歌研究会として結成した会である。尚、回覧雑誌とは、単一の雑誌を複数の会員で読み回すもので、文字も図版もすべて手がきである。また蘭菊会の会員の和田山蘭、藤野草明らは青森県の洋画の先駆者でもあったことから、雑紙の中には会員によって描かれた挿画が多く残されていて、明治期の洋画の傾向を知る、貴重な資料となっている。

この「白日」の扉には「蒼茫として大なるかな詩の野―
ねがはくは吾等をしておもうまま歌はしめよ　叫ばしめよ」と記され、ここに書かれている歌への思いは、そのまま画家達の思いにも通じるものであったろう。

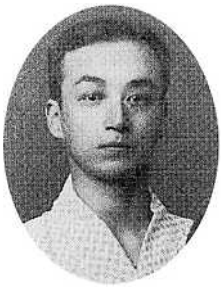
和田山蘭
＜肖像写真＞

和田山蘭　「観湖樓」

和田山蘭　「書斎のもの」
明治42

和田山蘭
「川村杜山」

青森市洋画研究会、北洋画会に関係した洋画家たちの作品



越前翆村
＜肖像写真＞

越前翆村　「海ぎしの村」

越前翆村　「十月十五日のスケッチ」

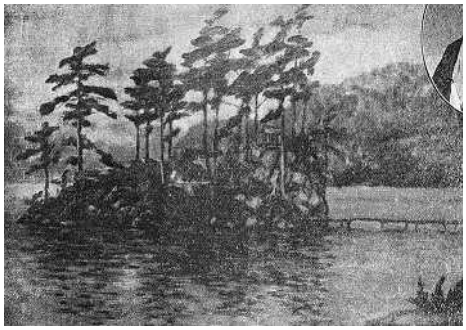
藤野草明　「窓」明治43

藤野草明　「新月」明治43

藤野草明　「渓流」明治43

木谷末太郎
＜肖像写真＞

木谷末太郎　「十和田湖御前ヶ浜」
大正７　青森県立美術館所蔵



木谷末太郎　「十和田湖」

森非折　「裸体研究第１号」より
大正３頃　青森県立美術館蔵

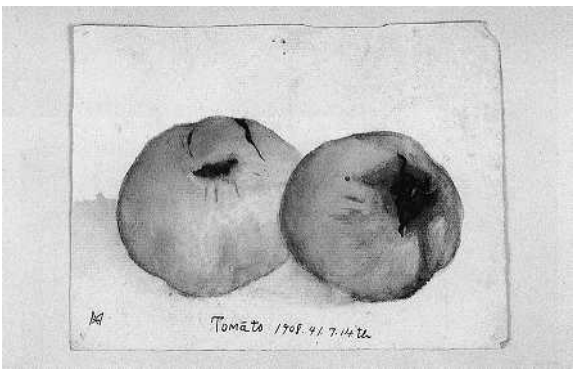
森非折　「裸体研究第１号」より
大正３頃　青森県立美術館蔵

森非折　裸体研究第１号」より
大正３頃　青森県立美術館蔵

弘前美弘会の洋画家たちの作品

大川亮　＜肖像写真＞

大川亮　「夕涼み」



大川亮　「トマト」

羽場金司　＜肖像写真＞

羽場金司　「自画像」
大正２　東京芸術大学美術館蔵

羽場金司　「境内」
明治41

古郡貞一　「自画像」
大正４　東京芸術大学美術館蔵

＜表３＞　青森県明治期図画教員一覧

番号	氏　名	雅号等	勤務学校	任　期	出身	生没年	卒業学校		卒業年月	
1	棟方　角馬	棟方月海	青森県師範学校	M９～M10 M27～M31	弘　前	天保７～M38				津軽藩士。後に北海道へわたる。
2	西舘　忠央		青森県師範学校	M10～M13						
3	成田　　泰	成田蠖園	青森県師範学校	M13～M20	弘　前					川上冬崖に師事。
4	松永　信嗣		青森県師範学校	M20～M21						
5	河村　久逸		青森県師範学校	M22～M24			東京工業学校			
6	板東　定治		青森県師範学校	M25～M27	徳島県		東京工業学校	特別科	M25	
7	中山　次郎	菅原次郎	青森県師範学校	M31～M32			東京美術学校	日本画科	M29. 7	
8	工藤　　晨	工藤青山	青森県師範学校	M32～M37			東京美術学校	日本画科	M32. 7	
9	足立　　啓	足立梧軒	青森県師範学校	M37～M42	東京市	M10～	東京美術学校	日本画科	M35. 7	
10	山崎　勇馬	山崎香雲	青森県師範学校	M42～T２	高知県	M９～	東京美術学校	日本画科	M31. 7	
11	伊藤万亀三郎		青森県女子師範学校	M44						
12	戸部　隆吉		青森県女子師範学校	M44			東京美術学校	日本画科	M44. 3	
13	成田　　泰		弘前中学	M17～M19						
14	松永　信嗣		弘前中学	M20～M22						
15	吉田　金吉		弘前中学	M25～M31			東京美術学校	特別の課程	M25. 2	
16	野崎　兼清	野崎華年	弘前中学	M31.2～M31.9	愛知県	文久３～	師：殿木晴吉	河野次郎		高橋由一門下の河野次郎と殿木晴吉にM16.11～M19.12に学ぶ。初期洋画の図画教員。名古屋に洋画所を開く。
17	岩本　安一		弘前中学	M31～M32	愛知県					田村宗立、川村清雄に学ぶ。
18	横井　俊造	広瀬俊造	弘前中学	M34～M37	秋田県		不同舎			不同社に入る前に秋田県中学図画教員の岡田精に学んだ
19	佐治　友八	佐治梅亭	弘前中学	M37～M40	福島県	M５～	東京美術学校	日本画科撰	M37. 7	川村雨谷、川端玉章に師事。
20	塩崎　一郎	塩崎逸陵	弘前中学	M40～M41	富山県	M17～	東京美術学校	日本画科	M40. 3	寺崎廣業に師事
21	世古　　温		弘前中学	M41～M42		M17～	東京美術学校	西洋画科	M41. 3	黒田清輝に師事
22	竹本　好郎	篠崎好郎	弘前中学	M42～M44	神奈川		福岡工業学校	染織科	M32. 4	旧姓は吉岡。M40に篠崎、M41竹本と改姓。卒業後母校に就職。
23	高橋　政美	美邦	八戸中学	M26～M32	八　戸	M16～	東京美術学校	特別の課程	M26	日本画を橋本雅邦に学ぶ。天心会会員。
24	島岡　常蔵	小栗常蔵	八戸中学	M27～M28	静岡県		東京美術学校	絵画科		
25	森川　　清	梅屋	八戸中学	M28～M31	秋田県	M２～				日本美術協会会員。
26	須々木寿太郎		八戸中学	M32～M33	岡山県	M７～T3.6	東京美術学校	図画講修科	途中退学	岡山県の訓導の後に八戸へ。明治36年『中等臨画帖』（吉田書房）出版。
27	八重畑逸蔵		八戸中学	M33～M36			青森師範学校		M23. 4	河野芳に油絵擦筆画、水彩画、板東定治と河村久逸に鉛筆画、棟方角馬と成田三千郎に毛筆画、用器画を学ぶ。
28	大久保千尋		八戸中学	M～M			寺崎廣業			
29	北山　晃文	杏堂	八戸中学	M41～T１	黒石町	M２～	三上仙年			油絵、図画共励会幹事。
30	山県　丹治		青森中学	M34～M36			東京美術学校	日本画科	M31. 7	
31	大和田篤治	一紅	青森中学	M37～M42	高知県	M８～T２	不同舎			高知県の高等小学校卒業後、M24に10ヶ月位神田小川町にあった淑美術館で鉛筆画、コンテ画を修業。M26.2に中江兆民を保証人にして不同社に入学。５年間修業。
32	三浦　自也		青森中学	M42～T２	岩手県		東京美術学校	日本画科	M33. 7	
33	松原　義七		弘前中学　木造分校	M35～M37	香川県	M８～				図画と静物を担当。東京写真研究会会員。
34	三輪　常松		弘前中学　木造分校	M37～M41					M18	
35	久保　提多		弘前中学　木造分校	M41～M42			東京美術学校	日本画科	M41. 3	
36	永栄　定義		弘前中学　木造分校	M43～T１			東京美術学校	図案科	M34. 3	
37	山主　重作		弘前高女	M34～M36			東京師範学校	手工専修科		
38	石川　準礼		弘前高女	M37～T	石川県		東京美術学校	漆工科	M27	
39	三輪　　正		八戸高女	M35～T15			岩手県師範		M18	
40	佐々木ぎん		青森高女	M41						
41	高橋荘之進	高橋米州	県立中学東奥義塾	M31～M34	弘　前	安政３～S９	三上仙年			菊池九郎の招請による。
42	工藤阿六郎		県立中学東奥義塾	M34～M37頃						
43	小山　敏彦		県立中学東奥義塾	M39			東京美術学校	日本画科		
44	高尾豊太郎		県立中学東奥義塾	M41						
45	大越　　直		県立中学東奥義塾	M42～M43			東京美術学校	日本画科		
46	寺島　仙岱		私立弘前女学校	M33～T４	弘　前	慶応３～				
47	三上藤太郎		私立桔梗学院	M39						
48	吉崎　北陵		私立桔梗学院	M41	青森市	～T７	土佐派			川辺御楯の門下。青森市高等小学校を13年勤める。大正元年に上京。
49	小岩　　峻		青森県工業学校	M44			東京美術学校	漆　科	M35. 7	
	落合　ラン		宮崎県立高等女学校	M41～M42			女子美術学校		M37.11	
	工藤　てふ		秋田県酒田高等女学校	M45～S２			女子美術学校		M43. 3	
			新潟県柏崎高等女学校	M44～M45						
	木戸　寛造	木戸竹石	北海道小樽高等女学校	M39	弘　前		女子美術学校			平尾魯仙、三上仙年に師事。明治12年頃に北海道に渡る。度々帰青し制作をする。アイヌ画を得意とする。第１回内国絵画共進会に北宗派画を２点出品。

＊この表は　金子一夫著『近代日本美術教育の研究　明治時代』を参考にし、県内の学校に勤務した者と、青森県出身者を抜粋して作成した。なお、その際に、他資料から判明した部分も追加してある。
＊表の中で、番号がないものは、青森県出身者で、県外の学校に勤務した人物である。
＊表中でMは明治、Tは大正、Sは昭和をあらわす。

＜表４＞　明治期洋画関係の主なる東奥日報新聞記事一覧

西暦	和暦	月	日	見出し	関係者	関係団体名など
1893	明治26	9	8	油川美術展覧会の模様 ＊８月27日～８月29日 油川小学校で		油川美術展覧会
1893	明治26	11	8	美術展覧会　＊11月３日～11月５日　高等小学校で		美術展覧会
1901	明治34	6	16	元寇記念油絵展覧会		元寇記念油絵展覧会
1906	明治39	5	10	洋画研究会	大和田篤治	洋画研究会
1906	明治39	5	12	洋画研究会の発会式	大和田篤治	洋画研究会
1906	明治39	5	14	洋画研究会発会式		洋画研究会
1906	明治39	6	19	洋画研究会		洋画研究会
1906	明治39	7	12	洋画研究会		洋画研究会
1906	明治39	8	23	洋画展覧会		洋画研究会
1906	明治39	9	5	洋画研究会		洋画研究会
1906	明治39	10	9	本市洋画研究会にては・・・・		洋画研究会
1907	明治40	5	6	洋画研究会の移転	大和田篤治	青森市洋画研究会
1908	明治41	5	19	洋画研究会の開催　＊５/22～　於青森市第三中学校		青森市洋画研究会
1910	明治43	4	3	北洋画会の設立　発会式		北洋画会
1910	明治43	4	6	北洋画会の発会式　＊４/10		北洋画会
1910	明治43	4	11	北洋画会発会式　＊４/10 於青森市浦町福士方		北洋画会
1910	明治43	4	24	北洋画会の開催　＊4/24 於青森市浦町		北洋画会
1910	明治43	8	31	新古書画及洋画陳列		北洋画会
1910	明治43	8	31	高小新築校舎の縦覧		北洋画会　青森市書画同好会
1910	明治43	9	1	北洋画会の展覧会　＊９/３～４　高等小学校		北洋画会
1910	明治43	10	4	別れて後　２－上	越前翠村：著	北洋画会
1911	明治44	1	8	北洋画会展覧会　＊第二回展覧会　１/５～８　於師範学校		北洋画会
1911	明治44	1	16	展覧会（1）	越前翠村	北洋画会
1911	明治44	1	17	展覧会（2）	越前翠村	北洋画会
1911	明治44	1	18	展覧会（3）	越前翠村	北洋画会
1911	明治44	1	21	展覧会（4）	越前翠村	北洋画会
1911	明治44	8	4	洋画展覧会　縦覧無料		北洋画会　西洋画会
1911	明治44	8	4	西洋画展覧会　＊８/５～７　於師範学校付属小学校		北洋画会　西洋画会
1911	明治44	8	4	西洋画展覧会　＊８/５,６　於師範学校付属小学校		北洋画会　弘前美弘会
1911	明治44	8	4	弘前絵画展覧会　８月１日、２日　弘前市津軽産業会館	蔦谷龍岬	弘前絵画展覧会
1911	明治44	8	6	洋画展覧会の作品		北洋画会　弘前美弘会
1911	明治44	8	4	弘前絵画展覧会		
1911	明治44	9	17	三本木町の洋画展覧会　＊９/10,11 於上北郡三本木小学校		三本木町アマチュア倶楽部
1912	明治45	2	21	青森と洋画　（1）	森飛雪　（非折）	北洋画会
1912	明治45	2	22	青森と洋画　（2）	森飛雪　（非折）	北洋画会
1912	明治45	2	23	青森と洋画　（3）	森飛雪　（非折）	北洋画会
1940	昭和15	10	18	青森県の美術史を綴る　物故作家遺作展		
1941	昭和16	9	24	香しい思い出　本県洋画研究会の元祖や卅五年前の展覧会	談：大川亮	

＊旧来の書画会形式で１日限りの開催に関するものは省いた。
＊展示内容が日本画や古器物であっても「美術」「展覧会」の名がつくものは掲載した。

＜表５＞　第３回北洋画会展覧会目録

作家名	番号	作品名	技法		展示会場
藤野眞一	1	秋の旅	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	2	夏の朝	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	3	温湯にて	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	4	黒森山	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	5	中野山より	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	6	六月	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	7	さあちゃん	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	8	荒川の朝	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	9	いほり	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	10	川岸	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	11	植物園	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	12	晩夏	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	13	戸山原	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	14	丸の内	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	15	夕暮早稲田	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	16	土手	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
藤野眞一	17	秋の暮	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	1	春の神厳	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	2	秋の台所	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	3	もや	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	4	紅葉の川	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	5	秋の山中	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	6	曇れる秋	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	7	冬の月	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	8	松原の雪	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	9	海村の冬	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	10	自画像	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
森非折	11	静物	油絵・水彩	北洋画会会員	第一室
望月肖三	1	甲州の秋	油絵・水彩		第一室
越前翠村				北洋画会会員	

作家名	番号	作品名	技法		展示会場
由井忠助	1	束稲山	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	2	梅雨期の日本海、	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	3	夕日の岩木山	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	4	蔵	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	5	大圓寺の塔	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	6	菖城天主閣	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	7	樹	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	8	新町夕暮	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	9	茂森残月	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
由井忠助	10	夕	水彩画	東京美術学校卒業	第二室
羽場金司	1	蔭の木	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
羽場金司	2	谷中学校の庭	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
羽場金司	3	上野公園の春	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
羽場金司	4	ランプ下	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
羽場金司	5	花	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
古郡貞一	1	雪	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
古郡貞一	2	浅瀬石川	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
古郡貞一	3	春	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
古郡貞一	4	撫子	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
古郡貞一	5	雲	水彩画	東京美術学校在学中	第二室
大川亮	1	あやめ	水彩画		第二室
大川亮	2	虞美人草	水彩画		第二室
大川亮	3	白百合	水彩画		第二室
大川亮	4	菱草	水彩画		第二室
蔦谷龍岬	1	京の春絹	日本画	東京美術学校卒業	第三室
大野芳經	1	納涼秋	日本画		第三室
大野芳經	2	少女	日本画		第三室
大野芳經	3	うづら	日本画		第三室
大野芳經	4	楓に小鳥	日本画		第三室
大野芳經	5	花鳥	日本画		第三室
楠菱雲	1	夏	日本画		第三室
楠菱雲	2	桜	日本画		第三室
楠菱雲	3	美人	日本画		第三室

会　　期　　明治44年８月５日～７日　三日間（当初は二日間であったが、１日延期）
場　　所　　青森師範学校
出品内容　　油絵　約40点、　水彩　約60点、日本画　数点　　合計約100点
＊第３回北洋画会は新聞記事では「西洋画展覧会」と書かれている。北洋画会と東京美術学校の関係者の合同の展覧会。
＊この表は東奥日報紙の明治44年８月６日付の記事をもとに作成した。

＜表６＞　北洋画会関係者、出品者一覧

	賛助員	会　員	第１回展覧会	第２回展覧会	第３回展覧会	
越前　翠村		○	○	○	○	明治21年～昭和３年、秋田県生まれ。北洋画会会員。嘗てしばらく東京の渡辺某に入門。青森大林区署に奉職。歌人でもある。
一戸　岳逸	○					明治６年～昭和14年、弘前市生まれ。明治27年東奥日報社に入社。赤十字社特別社員。大正７年、私財で青森市内の自宅に通俗図書館を設立。明治36年に日本画の団体「青森市書画同好会」を設立、大正12年まで会主をつとめる。
大川　　亮		○			○	明治14年～昭和33年、南津軽郡大光寺（平賀町）生まれ。李葉と号す。北洋画会会員。赤坂溜池研究所に通う。東京駒場の農業実科（東大農学部の前身）に学ぶが中退。その後一年東京美術学校に在学。明治36年青森御料局に勤務。＜表１＞参照。
大沢　慶一				○		詳細不明。
大野　芳經					○	生没年不明。南津軽郡大光寺（平賀町）生まれ。女性。本名は大野弥生子。７歳の折養父母と共に上京し十二歳の秋寺崎廣業画伯の門に入る。明治34年に日本女子美術学校の第１回生となる。その後白木屋呉服店の意匠部に主任として勤務。その後白馬会にも入会。研精画会にも出品する。
岡　　吉枝			○			詳細不明。
落合らん子	○					生没年不明、青森市生まれ。女性。油絵と擦筆画に妙技を示す。明治30,40年代の青森の洋画では先生の一人として知られた人で、森非折も落合から洋画を学んだ。落合と彼女から教えを受けた渡辺まさ子の二人が、青森で（女で）始めての野外写生をした人物である。明治後期に上京。
柿崎　清助		○				生没年出身地不明。北洋画会会員。青中卒業生。洋画家になるため一家で上京、明治44年当時は、東京美術学校１年生。
楠　　菱雲					○	詳細不明。
工藤　九折				○		詳細不明。
今　　克巳		○		○		明治23年～昭和57年、弘前市生まれ。北洋画会会員。明治44年当時に青森郵便局通信書記に奉職。水彩画を研究。善知鳥彫の創始者。
境　　邦雄				○		詳細不明。
猿賀　勇吉			○			詳細不明。
下沢　才一	○	○		○		生没年出身地不明。北洋画会会員。附属小学校教師。
高田孝一郎			○	○		詳細不明。
蔦谷　龍岬					○	明治19年～昭和８年、弘前市生まれ。本名幸作。明治44年に東京美術学校日本画科卒業。帝展特選、帝展審査員となる。東京に鐸鈴社を開塾する。東奥美術社､東奥美術展の設立に貢献する。
羽場　金司					○	明治19～大正５、弘前市生まれ。弘前美弘会会員。大正３年に東京美術学校を卒業する。大正期の洋画の美術団体「北斗社」を設立した関彦四郎と交流あり。
藤野　眞一	○	○	○	○	○	明治24～大正６、黒石市生まれ。草鳴と号す。北洋画会会員。幼児に青森市安方町に移る。18歳の頃から画筆に親しむ。青森中学校卒業後、青森大林区署に勤務。22歳（明治43年）の時に絵に専心するために上京。三ヶ月間東京の大下藤次郎について水彩画を研究。翌年の23歳の時に病に罹り、死去。歌人。
古郡　貞一			○		○	弘前美弘会会員。明治44年当時は東京美術学校３年生。
松永　　工	○					詳細不明。
三浦　恵雨（辰夫）			○	○		生没年出身地不明。北洋画会の会員。明治40年前半に在京し、原町の研究所に通う。
棟方忠太郎		○	○			生没年不明。青森市出身。北洋画会会員。長島小学校校長の息子。洋画家をめざし上京。京北中学校４年生（明治44年当時)。元白馬会付属の原町研究所に通う。
望月　肖三					○	詳細不明。
森　　非折（飛雪）（旭）		○	○	○	○	明治25年～大正13年、青森市生まれ。北洋画会会員。青森高等小学校を卒業。洋画を良くし、後に上京して、一時、五姓田芳柳に学ぶが中断。青森大林区署に奉職。二科会入選。雑紙に漫画を描いたこともあり。歌人。
由井　忠助					○	生没年出身地不明。東京美術学校西洋画科を卒業。明治44年来県。
吉崎　北陵	○		○			生年不明～大正７年、青森市生まれ。日本画家、土佐派、川辺御楯に師事、武者絵を得意とする。大正元年に上京。＜表３＞参照。
山崎　勇馬	○					明治９～没年不明、高知県生まれ。東京美術学校日本画家卒業。青森師範学校図画教員。＜表３＞参照。
山内　元八	○					詳細不明。

＊この表は＜表４＞にある東奥日報紙の記事をもとに作成した。

＜表７＞　三本木アマチュア倶楽部展覧会目録

作家名	番号	作品名	技法	現住所
北田　昇	1	晩　夏	水彩	三本木
北田　昇	2	秋の朝	水彩	三本木
北田　昇	3	穆山禅師肖像	水彩	三本木
江渡圭一郎	1	晩　秋	水彩	藤坂
江渡圭一郎	2	静　物	水彩	藤坂
江渡圭一郎	3	ビール瓶	水彩	藤坂
江渡圭一郎	4	達　磨	水彩	藤坂
江渡圭一郎	5	夕　照	水彩	藤坂
江渡圭一郎	6	朝の十和田湖	水彩	藤坂
江渡圭一郎	7	傾く日影	水彩	藤坂
江渡圭一郎	8	真　昼	水彩	藤坂
江渡圭一郎	9	流の跡	水彩	藤坂
江渡圭一郎	10	夏の朝	水彩	藤坂
江渡圭一郎	11	晩　煙	水彩	藤坂
江渡圭一郎	12	残　暉	水彩	藤坂
江渡圭一郎	13	洩れ日	水彩	藤坂
江渡圭一郎	14	岩	水彩	藤坂
立花甚之助	1	初秋夕照	水彩	三戸
泉山　幸吉	1	水　車	水彩	八戸
泉山　幸吉	2	白銀海岸	水彩	八戸
泉山　幸吉	3	静なる水	水彩	八戸
稲垣　昇	1	淡い月	水彩	八戸
稲垣　昇	2	正午の本郷庵	水彩	八戸
稲垣　昇	3	夜の池の端	水彩	八戸
稲垣　昇	4	新井田川の上流	水彩	八戸
大原直二郎	1	峡　谷	水彩	八戸
武内泰三郎	1	水かむ岩	水彩	八戸
村田　大作	1	長き影	水彩	八戸
武内吉三郎	1	風　景	水彩	八戸
稲葉　学	1	初　春	水彩	八戸
稲葉　学	2	静　物	水彩	八戸
接待　康夫	1	入　会	水彩	八戸
接待　康夫	2	場　末	水彩	八戸
接待　康夫	3	山　道	水彩	八戸
樋谷重太郎	1	静　物	水彩	八戸
樋谷重太郎	2	静　物	水彩	八戸
樋谷重太郎	3	山家の夏	水彩	八戸
樋谷重太郎	4	壺坂寺	水彩	八戸
奥村熊四郎	1	風　景	水彩	東京
奥村熊四郎	2	風　景	水彩	東京
奥村熊四郎	3	風　景	水彩	東京

作家名	番号	作品名	技法	現住所
北田　昇	1	唐　葵	油画	三本木
北田　昇	2	達磨大師	油画	三本木
北田　昇	3	少女肖像	油画	三本木
北田　昇	4	少女肖像	油画	三本木
江渡圭一郎	1	十和田湖の夕	油画	藤坂
江渡圭一郎	2	花	油画	藤坂
江渡圭一郎	3	蔦川の飛沫	油画	藤坂
江渡圭一郎	4	暮れ行く空	油画	藤坂
江渡圭一郎	5	最後の光	油画	藤坂
江渡圭一郎	6	植物園の一部	油画	藤坂
江渡圭一郎	7	初　夏	油画	藤坂
江渡圭一郎	8	強き光	油画	藤坂
江渡圭一郎	9	午後の花園	油画	藤坂
江渡圭一郎	10	犬	油画	藤坂
江渡圭一郎	11	女	油画	藤坂
江渡圭一郎	12	小　菊	油画	藤坂
江渡　文蔵	1	怒　濤	油画	五戸
江渡　文蔵	2	小　憩	油画	五戸
江渡　文蔵	3	雨後風景	油画	五戸
立花甚之助	1	静　物	油画	三戸
立花甚之助	2	夏の午後	油画	三戸
立花甚之助	3	静　流	油画	三戸
泉山　幸吉	1	夏の夕	油画	八戸
泉山　幸吉	2	蔦　沼	油画	八戸
泉山　幸吉	3	春の十和田湖	油画	八戸
泉山　幸吉	4	初　春	油画	八戸
稲垣　昇	1	郊　外	油画	八戸
稲垣　昇	2	波　浪	油画	八戸
稲垣　昇	3	スミレ	油画	八戸
稲垣　昇	4	洩れ日	油画	八戸
稲垣　昇	5	植物園	油画	八戸
稲垣　昇	6	赤き光り	油画	八戸
稲垣　昇	7	炎　天	油画	八戸
稲垣　昇	8	女	パステル	八戸
稲垣　昇	9	愛ちゃん	油画	八戸
稲葉　学	1	小中野	油画	八戸
福田　雨声	1	放　牧	油画	八戸
福田　雨声	2	厩舎内の馬	油画	八戸
接待　康夫	1	静　物	油画	八戸
接待　康夫	2	河　岸	油画	八戸
接待　康夫	3	堤の朝	油画	八戸
接待　康夫	4	スケッチ	油画	八戸
接待　康夫	5	スケッチ	油画	八戸
接待　康夫	6	スケッチ	油画	八戸
接待　康夫	7	スケッチ	油画	八戸
北山　晃文	1	川　口	油画	八戸

会　　期　　明治44年９月10日、11日　二日間
会　　場　　三本木小学校
＊以上の他尚逸したるもの20点程あり。展示点数約100点。
＊この表は東奥日報紙の明治44年９月17日付の記事をもとに作成した。

＜表８＞　青森県の明治期に関する資料一覧

番号	筆者、編集者、監修	本　　名	発　行　所	発行年
1	中畑長四郎	津軽の美術史	北 方 新 社	1991
2	東京文化財研究所美術部	「明治期の万国博覧会、勧業博覧会」	東京文化財研究所	1997
3	青森県立郷土館	調査研究年報　第32号對馬恵美子　『明治期における美術団体「青森市書画同好会」の活動について』	青森県立郷土館	2008
4	花巻市博物館	「再発見・橋本雪蕉の画業を探る」	川嶋印刷株式会社	2007
5	仙台市史編さん委員会	仙台市史　特別編３　美術工芸	仙　台　市	1996
6	高井憲夫	『美神逸脱「草莽の画家　鳥谷幡山』	青森コロニー印刷	2006
7	画報社	日本美術年鑑　明治43年（1910年）復刻版	国書刊行会	1996
8	青森県史編さん近現代部会	青森県史　資料編　近現代１	青森県立郷土館	2002
9	折橋俊英	日本美術館	小　学　館	1997
10	青森県立郷土館	郷土の生んだ不世出の画人　如洋　野沢如洋展図録	青森県立郷土館	1978
11	青森県立郷土館	青森県近代洋画のあゆみ展　展示図録	青森県立郷土館	1990
12	青森県立郷土館	青森県近代日本画のあゆみ展　展示図録	青森県立郷土館	1998
13	青森県立郷土館	日本近代水彩画の全盛期と松山忠三展　展示図録	青森県立郷土館	1996
14	青森県立郷土館	野沢如洋と橋本雪蕉展　展示図録	青森県立郷土館	1994
15	青森県立郷土館	今純三・今和次郎展　ふたりが描いた大正・昭和のくらしと風景	青森県立郷土館	2002
16	青森県立郷土館	蓑虫山人と青森　放浪の画家が描いた明治の青森	青森県立郷土館	2008
17	青森県立郷土館	描かれた青森	青森県立郷土館	1999
18	盛田稔、長谷川成一	図説日本の歴史２　図説青森県の歴史	河出書房新社	1991
19	長谷川成一	図説弘前・黒石・中津軽郡の歴史	郷土出版社	2006
20	瀧本壽史	図説青森・東津軽の歴史	郷土出版社	2007
21	盛田稔	図説上北・下北の歴史	郷土出版社	2005
22	盛田稔	図説三戸・八戸の歴史	郷土出版社	2005
23	上杉修・八戸社会経済史研究会編さん	明治百年記念出版　写真で見る八戸の歴史　明治・大正の試練	北方春秋社	1970
24	弘前市立博物館	青森県出身在住美術家工人等名簿	小 野 印 刷	1983
25	弘前市立博物館	青森県内美術家団体名簿	小 野 印 刷	1983
26	青森県人名辞典編さん室　尾崎竹四郎	青森県人名大辞典	東奥日報社	1969
27	「新編弘前市史」編纂委員	新編弘前市史　資料編４（近・現代編Ⅰ）	小 野 印 刷	1997
28	「新編弘前市史」編纂委員	新編弘前市史　通史編３（近世２）	小 野 印 刷	2003
29	林柾次郎	月刊東奥２巻１号 木村捨三「その頃の弘前画壇　―明治30年前後の話」	東奥日報社	1940
30	武田三作	新聞記事に見る青森県日記百年史	東奥日報社	1978
31	津幡敬正、工藤晃	東奥日報百年史	東奥日報社	1988
32	東奥日報社	青森県総覧（復刻版）	津 軽 書 房	1998
33	高階秀爾、小林忠、三輪英夫、藤森照信	日本美術全集　第21巻　江戸から明治へ　近代の美術１	講　談　社	1991
34	木村紃也	青森県100年のアーカイブス　―明治・大正・昭和の記録―	株式会社　生活情報センター	2006
35	青森市史編纂室	青森市史別冊人物編	青　森　市	1960
36	弘前市史編纂委員会	弘前市史（全二巻）明治・大正・昭和編	株式会社　名著出版	1973
37	小岩信竹、高橋堅太郎、四宮俊之、工藤堯	青森県の百年　県民百年史２	株式会社　山田出版社	1987
38	八戸市立図書館	奥南新報件名目録　第一巻	八戸市立図書館	1970
39	金子一夫	近代日本美術教育の研究　―明治時代―	中央公論美術出版	1992
40	南部美術（杉本安俊）	青森県南部書画人名典	伊 吉 書 院	1985
41	黒石いずみ	「建築外」の思考 今和次郎論	株式会社ドメス出版	2000
42	弘前市立博物館	津軽の絵師	凸版印刷株式会社	1982
43	青森県立図書館、青森県近代文学館	思うまま　歌わしめよ　叫ばしめよ　青森県の近代文学	青森県立図書館、青森県近代文学館	1998
44	青森県史編さん室	青森県史研究第６号研究ノート　對馬恵美子　「大正期の青森県出身の在京美術家団体」	青　森　県	2002
45	河北倫明　監修	近代日本美術事典	講　談　社	1989
46	武田三作	新聞記事による青森県日記百年史	東奥日報社	1988
47	船水清	青森県の写真事始	北 方 新 社	1977
48	ＪＷＡ	日本美術を支えた女性画家たち	ＪＷＡ日本美術と女性	1994

※上記の他に、北斗新聞・東奥日報紙を参考にした。
※本稿内の写真は上記の資料より引用した。